

# 「家族の多様化」と家政学における仮説構成

——単身赴任家族の事例をもとに——

竹 田 美 知

社会の変化とライフコースの長期化によって、少子・高齢社会における家族は、多種・多様な形が出現した。かつてエレン・リッチャーズは、その生活環境の概念図式の中で社会環境の下位概念として近接環境としての夫婦、親子、兄弟姉妹、親類、近隣関係を提示した。しかし日本の高度成長時代には、都市への人口集中によって大規模な地理的移動が引き起こされ、すでに親類関係や近隣関係は変容した。そして家族関係も個人の職業上のキャリアによって、コンピューターカップルや単身赴任のように近接の環境を超えて広がりを見せ初めている。また人の長い一生を鑑みると家族や地域といった従来から存在する人と人との繋がりとともに、同じ志を持つ個人の地縁や血縁を超えた多様な繋がりが従来からの家族や地域の繋がりと同様に「人と人との繋がり」としてその存在を認められつつある。

そのような動きの中で、家政学が前提として考える家族としての「人と人との繋がり」のあり方も多種多様なヴァリエーションを求められている。ここでは、個人が、家族とどのような「人と人との繋がり」を主体的に選択し、個人のウェルビーイングを実現していくかということを社会科学的手法、すなわち仮説構成によって説明していく。

## 【1】家族に関する調査と「仮説構成の手法」

「仮説」とは経験的事象を科学的に説明もしくは予測するために定式化された未検証な命題である。例えば「家政学における家族」を「核家族という形態をとり、家族成員のために集団的福祉を追求する」と定義して家族を対象とした調査を行なう場合と、「家族は個人と個人との結びつきが基本で個人のウェルビーイングを追求する」と定義して家族調査を行なう場合とでは、大きくその家族に対する仮説群の守備範囲は異なることになる。従来の家政学が、前者のほうに傾きがちの仮説群に研究実績を積み上げてきたことは周知の事実であった。すなわち「夫婦と子ども」が基礎的な単位として設定される限定、「家族集団にとっての個人の役割に焦点が当てられる」といった限定が暗黙の了解として働き、個人を主体とした家族との関係に焦点を当てた変数や仮説群が提案されにくい状態にあった。そこで本稿で提案するのは、このような家政学における仮説の偏りを克服するために幅広い守備範囲を持った「仮説構成の手法」である。

仮説構成を試みた場合は家族を対象とした調査を行なう場合に以下のような点で優れていると思われる。

- 1) 調査者の頭の中で、変数と変数との関連が明確になっている場合もあるが、変数と変数との関連をさらに仮説の形で記録する方がより明確になる。特に複数の調査者がグループで調査する場合は、おのおのの調査者の変数と変数との関連を調査前に確認しておくことが、その後の効率的な調査票設計および解析にとって便利である。
  - 2) 変数と変数との関連を仮説の形で記録することは、その関連に関しての吟味をさらに加えることができる。関連のあり方がどのようなものか、またその関連は限定条件つきで可能になるのか、その関連に他の変数が介在している可能性はないのか、使われている変数をさらに明確化することができるかといった検討を加えることができる。ここで行なわれた吟味は、後に調査票に入れるべき質問項目の検討、及び分析の深化にも役立つ。
  - 3) 調査者と同じようなテーマを持った様々なデータを吟味する場合も、仮説構成の作業は有効であろうと思われる。当該の問題関心のどの部分が他の研究者によって光を当てられ明確になっているか、また見落とされている部分はどこか、これらのことをデータの中に明示的、暗示的に示された仮説を検討することによって理解することができる。そしてそこでの検討結果、得られた仮説群は、自らの仮説構成にフィードバックすることができる。
  - 4) 問題関心の分析、概念分析の段階で説明のために使われた概念が適切であるかどうかを、仮説構成の段階で確認しチェックすることができる。これらの概念が問題を説明するためにすべて使われなければならないか、または選択して核心に近いものを選ぶ必要があるかを考慮する。通常調査票にあげうる質問項目の数量は限界があり、あまり長い調査票は、回収率も下げるし無効票も増やす。説明のために最低必要な変数はどのくらいか、そしてそれらはどのように相互に関係しあっているかを調査に先立って仮説化することで、調査の成功に一步近づく。
  - 5) 調査に先立って立てた仮説が、調査によって検証されえなくても、なぜ検証されえなかったかを考える際に、調査前に考えた仮説は大いに役に立つ。むしろ検証されなかった仮説を再度構成することによって、問題に対する説明は一步前進するといつてよい。
- 以上のようなことから、仮説構成は調査にとって必要不可欠のものである。この過程で留意しなければならないのは、テーマの持つ持ち味、問題性を損なわないようにすることである。

**【2】 単身赴任に関する従来研究とその仮説の検討**

松岡英子氏の論文は、単身赴任に関しての理論的枠組を呈示している定量調査である（松岡，1983）。仮説は命題の束として記述されることが多い。それらの命題群は、上位命題とさらに明細に記述した下位命題に分けられる。

表1 松岡氏の定量データから得られた上位命題作り

|  |
|--|
| <p>松岡英子氏の「地域移動と世帯分離－単身赴任とその生活－」家庭科教育 7月臨時増刊、1983を検討して得られた上位命題群をここに上げてみよう。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 単身赴任の経験回数が多い夫ほど、生活時間が規則的に傾向がある。</li> <li>2) 単身赴任の経験回数が多い夫ほど、収入満足度が高くなる傾向にある。</li> <li>3) 家族との対面接触回数の少ない夫ほど、教養型・実用型の余暇活動になりやすい。</li> <li>4) 家族との対面接触回数の多い夫ほど、家族との団欒型の余暇活動になりやすい。</li> <li>5) 家族との物理的距離が近い夫ほど、家族との対面接触回数が多い。</li> <li>6) 家族との対面接触回数の多い夫ほど、初回の単身赴任にはかえって孤独感を味わう機会が多い。</li> <li>7) 初回の単身赴任ほど、仕事に生きがいを感じる者が多い。</li> <li>8) 単身赴任経験者ほど、家族の幸福に生きがいを感じる者が多い。</li> <li>9) 単身赴任をした夫のほうが、妻よりも配偶者への意識の変化が起き難い。</li> </ol> |
|--|

これらの命題群の中には、例えば6)の命題のように、予測に反した命題も上げられている。そこで疑問を解決するためには、6)の概念を変数化するとき、他の変数が想定できないか、また変数と変数との間に介在する変数はないか、6)の命題が成立する条件は、どのような条件か、などのことをさらに検討する余地がある。定量データから仮説を検討する時は、すでに検証された命題群の中にも、変数の吟味や変数の布置・関連を検討することによって新たな命題が発見される可能性が残されている。

次に定性データからの上位命題の構成を試みてみよう。表2は、読売新聞記事のデータから、独立変数と従属変数との関連を上位命題化したものである（読売新聞社，1982）。単身赴任の家族員のストレス（従属変数）をライフコース、家族構成、ライフスタイル、生活費、生活時間、家族内関係、家族の役割構造、社会的ネットワーク、職場の体質、転勤経験などの変数（独立変数）で説明する場合、次のような上位命題が考えられる。

表2 定性データから得られた上位命題作り

|  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ライフコースの危機的段階にある家族員ほど、単身赴任によってストレスが増大する。</li> <li>2) 3世代家族では高齢者ほど、家族の単身赴任によってストレスが増大する。</li> <li>3) 家族員のライフスタイルが不一致であるほど、単身赴任によってストレスが増大する。</li> <li>4) 家族員、各々の個人のライフスタイルが確立されていないほど、単身赴任によって個人のストレスが増大する。</li> <li>5) 支出が多ければ多いほど、単身赴任によってストレスが増大する。</li> <li>6) 生活財処理能力がないほど、単身赴任によってストレスが増大する。</li> <li>7) 生活時間が不規則になるほど、単身赴任によってストレスが増大する。</li> <li>8) 生活時間における拘束時間が増えれば増えるほど、単身赴任によってストレスが増大する。</li> </ol> |
|--|

- 9) 単身赴任後の家族関係が稀薄になればなるほど、単身赴任によってストレスが増大する。
- 10) 単身赴任前の家族関係が危機的状況にあればあるほど、単身赴任によってストレスが増大する。
- 11) 単身赴任前の性別分業度が高いほど、単身赴任によってストレスが増大する。
- 12) 単身赴任家族を取り巻く周囲の人々が、彼らに「問題家族」というレッテルを貼れば貼るほど、単身赴任によって家族員のストレスが高まる。
- 13) 単身赴任家族の社会的ネットワークが稀薄であればあるほど、単身赴任によってストレスが増大する。
- 14) 新しい環境（職場仲間、友人など）に不適應であればあるほど、単身赴任によるストレスが増大する。
- 15) 転勤経験が多いほど、単身赴任によってそのストレスが増大する。

### 【3】 従来の研究における仮説から新しい仮説へ

上位命題の変数の中には、さらに変数を明細化することによって命題を整理し、関連づけることができる変数がある。例えば、表2では「家族関係」という変数がしばしば使われているが、この変数が意味するのは、家族間のコミュニケーション量なのか、対面での接触量（訪問回数）なのかということが問題となる。「家族関係」という変数の設定はそれらのどの変数なのか明かにしない。そこで中位命題、ないしは下位命題を作成することによってこれらの関係を整理する必要がある。

#### 【3-1】 変数が連続量として測定可能な場合の下位命題作りの例

表 3-1 定性データからの下位命題作り

|          |   |
|----------|---|
| 上位命題 9)  | [表 2 の 9] 単身赴任後の家族関係が稀薄になればなるほど、単身赴任によってストレスが増大する。                |
| 中位命題 9-1 | 家族のコミュニケーションの密度が小さければ小さいほど、単身赴任によるストレスが増大する。                      |
| 下位命題 9-1 | 夫が家族のもとに帰省する回数が少ないほど、単身赴任によって、ストレスが増大する。                          |
| 下位命題 9-2 | 電話やメール・手紙での交信回数が少ないほど、単身赴任によるストレスが増大する。                           |
| 下位命題 9-3 | 夫が期待しているコミュニケーションの手段と家族が期待しているコミュニケーションの手段が異なるほど、単身赴任によるストレスは高まる。 |
| 下位命題 9-4 | コミュニケーションにかかる費用が高いほど、単身赴任によるストレスが高まる。                             |

というように、下位命題を構成することによって上位命題がさらに精緻化される。先の表1の上位命題6「家族との対面接触回数が多い夫ほど、初回の単身赴任時にはかえって孤独感を味わう機会が多い」という命題と上記の表3-1の下位命題9-1「夫が家族のもとに帰省する回数が少ないほど、単身赴任によってストレスが増大する」とを比較してみよう。双方の命題は一見矛盾しているように見えるが、変数の明細化によって次のような下位命題を提案することができるのではないだろうか。

表 3-1-1

|            |   |
|------------|---|
| 修正下位命題 9-1 | 夫と家族との対面接触回数にはある限界点があり、その限界点までは、対面接触（訪問）回数が増えるのに比例して夫の孤独感（ストレス）は低くなる。しかし対面接触回数が限界点を超えれば（訪問回数があまりにも多すぎると）かえって夫の孤独感（ストレス）は増加する。 |
|------------|---|

このように、変数と変数の関係が必ずしも正規比例線の形ばかりでなく、正規曲線の形になる可能性を想定した修正命題を立てることによって、命題群がより明細化されデータの比較が有効になる場合もある。ただしこのようなデータごとの検証命題の不一致は双方のサンプルの質的、量的差異や偏りに起因することが多い。その場合はこのような修正仮説を考えることによってではなく、命題自体がどのような条件のもとで検証されたか、また説明に使われた変数同士の吟味をすることが先決である。

### 【3-2】変数が非連続体である時の下位命題作りの例

概念が非連続体、例えばタイプ（範疇、類型）の場合は、下記のようにタイプを構成する基本的軸（次元）や要素を考えることによって新たな下位命題が創出できる。

- 1) そのタイプを構成する基本的な軸（次元）や要素を見つけ出す。
- 2) 軸（次元）のテストをする。タイプに関連する多様な事例を上げ、それらの事例にスコアを与える基本的軸（次元）を探し出す。そしてすべての事例はこの軸（次元）上に集まるかどうかをテストする。
- 3) その基本的な軸（次元）に集まる変数を取り上げてみる。
- 4) 複数の基本的軸を見出すことができれば、複数の基本的軸を組合わせて、タイプを表現してみる。それらの複数の軸の組合せでできた時限によってタイプ分けが可能になる。例えば一つのタイプが X 変数、Y 変数ともある軸で高いスコアが得られると予測され、もう一つのタイプが X 変数は高いが、Y 変数は低いスコアが得られると予測されるなら、これらの二軸を交差させて、4つのタイプが呈示できる。

単身赴任家族におけるストレスのパターンというタイプ概念について表 3-2 の手法で下位命題の可能性について検討してみよう。

表 3-2 タイプ概念からの下位命題作り 1

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 単身赴任家族のストレスを構成する基本的軸（次元）・要素を考えてみる。単身赴任の生活のストレスに関連する軸は下記のような軸が考えられる。             <ol style="list-style-type: none"> <li>①「生活財・生活便益の形態」の軸</li> <li>②「生活財の配分と生活目標」の軸</li> <li>③「家族内の関係と社会的ネットワーク」の軸</li> <li>④「生活文化と精神的再生産」の軸</li> </ol> </li> <li>2) 単身赴任家族の定量データや定性データの結果はこれらの軸上にどのように位置付けられるかテストする。</li> <li>3) 以上の軸に含まれる連続体量の変数は次のような変数である。             <ol style="list-style-type: none"> <li>①収入水準など</li> </ol> </li> </ol> |
|--|

②家計の配分形態（資産と家計の規模）など  
 ③家族とのコミュニケーション量（訪問回数、電話量）など  
 ④家族の価値観など

4) ③の軸における変数と④の軸の変数の組合せによるタイプの創出をする。そして新たな下位命題をタイプとして表現する。③の軸上の変数である「訪問（帰省）回数」と④の軸上の変数である「個人の価値観」を組み合わせ、タイプを用いた下位命題を構成すると、次のようなタイプが析出される（付表1）。

**タイプA** 「老親重視型」は単身赴任後の帰省回数が多く、また価値観も伝統的であることが多い。  
 下位命題A 帰省回数が多く、価値観が伝統的である「老親重視型」は、単身赴任によって、ストレスが増加する。

**タイプB** 「子どもの教育重視型」は単身赴任後の帰省回数が多く、また価値観は達成主義的であることが多い。  
 下位命題B 帰省回数が多く、価値観が達成主義的である「子どもの教育重視型」は、単身赴任によって、ストレスが増加する。

**タイプC** 「男のミエはり型」は単身赴任後の帰省回数が少なく、また価値観は伝統的であることが多い。  
 下位命題C 帰省回数が少なく、価値観が伝統的である「男のミエはり型」は、単身赴任によってストレスが増加する。

**タイプD** 「会社生活重視型」は単身赴任後の帰省回数が少なく、また価値観は達成主義的であることが多い。  
 下位命題D 帰省回数が少なく、また価値観が達成主義的である「会社生活重視型」は、単身赴任によってストレスを感じることは少ない。

表 3-2-1 単身赴任の生活機能障害パターン

| 生活の機能障害の類型  | 次元×次元                   | 変数×変数                          | プロフィール  |
|-------------|-------------------------|--------------------------------|---|
| 二重生活浪費型     | 生活財・生活便益×生活財配分形態        | 収入水準（高）×家計支出の形態（フロー）           | 単身赴任以後も以前の生活の質を落としたいくない。住居もマンション購入などして二重の生活費を払う。夫もレストランなどで外食することが多い。        |
| マイホーム物神化型   | 同上                      | 収入水準（高）×家計支出の形態（ストック）          | 苦勞して建てたマイホームを売ることができず、夫だけ単身赴任。住宅ローンの返済に追われても、マイホームだけは手放したくない。               |
| ローン借金型      | 同上                      | 収入水準（低）×家計支出の形態（フロー）           | もともと収入が少ないところに、二重生活による出費をおさえきれず、退職金の前借りやサラリーローンに手を出してしまう。会社での地位の低い人や若い人に多い。 |
| 節約生活縮小型     | 同上                      | 収入水準（低）×家計支出の形態（ストック）          | 単身赴任した夫は年に1回か2回しか交通費節約のため帰らない。家族も食費や交際費、衣服費をきりつめ、大幅な節約をする。                  |
| 電話・帰宅旅費増大型  | 生活財・生活便益×家族関係・社会的ネットワーク | 家計支出の形態（フロー）×家族内コミュニケーション密度（高） | 単身赴任先から日に何度も電話し、かつ帰宅も月に何回もする。家族思いの夫に妻は感謝しつつも赤字会計に悩まされる。                     |
| 個々の生活エンジョイ型 | 同上                      | 家計支出の形態（フロー）×家族内コミュニケーション密度（低） | 夫は赴任先で、社会的ネットワークを新しく作り、妻は夫の世話から解放された時間、自分の趣味に励む。                            |

|           |                       |                                 |   |
|-----------|-----------------------|---------------------------------|---|
| 交通重視型     | 同上                    | 家計支出の形態（ストック）×家族内コミュニケーション密度（高） | 子どもとの絆を確認するために文通を続ける。見えなかった父親像が見えてきて、互いの行動や考えが手紙によって蓄積される。しかしスキップにまざるものはないと考えている。     |
| 個々の生活閉鎖型  | 同上                    | 家計支出の形態（ストック）×家族内コミュニケーション密度（低） | 単身赴任の出費を抑えるためにも、帰宅は稀である。何年かたつと、家族との対話も減少し帰ってもなんとなくくしらせる。                              |
| 老親重視型     | 家族関係・社会的ネットワーク×精神的再生産 | 家族内コミュニケーション密度（高）×価値観（伝統的）      | 老親とともに転勤できないので、夫だけが単身赴任する。老親は息子のいない寂しさで老化も進み、妻も老親の世話でストレスがたまる。                        |
| 子どもの教育重視型 | 同上                    | 家族内コミュニケーション（高）×価値観（合理的）        | 子どもの進学のため単身赴任したが、子どもとのコミュニケーションはかかさない。いつ何時でも欠かさない。                                    |
| 男のミエハリ型   | 同上                    | 家族内コミュニケーション（低）×価値観（伝統的）        | 男は何度も家に電話するのはめめしい。妻に家庭のことはすべてまかせておけばよい。単身赴任は問題ないと考えているが、妻は役割過重で悩んでいる。                 |
| 会社生活重視型   | 同上                    | 家族内コミュニケーション（低）×価値観（合理的）        | 単身赴任先の仕事が過重で昼夜とも仕事を猛烈にしている。生活も仕事中心で、家族とのコミュニケーションも少ない。                                |
| 儀礼・接待重視型  | 精神的再生産×生活財・生活便益       | 価値観（伝統的）×収入水準（高）                | 単身赴任をしたことで、親しい職場の人間関係ネットワークが広がり、交際費に費やす支出、時間が多い。冠婚葬祭などに費やす出費も多い。                      |
| 専業主婦やりくり型 | 同上                    | 価値観（伝統的）×収入水準（低）                | 夫が家にいないぶんだけ、妻がしっかりしなければ家庭が守れないと思っている。赤字続きだが、節約してパートなどで家を空けず、専業主婦に徹することで切り抜ける。         |
| 共働き優先型    | 同上                    | 価値観（合理的）×収入水準（高）                | 妻の仕事をやめてまで、転勤したくない。それぞれの仕事を大事にして、各々の道を行きたい。女性も仕事に生きがいを求めることに賛成である。                    |
| 妻パート勤め型   | 同上                    | 価値観（合理的）×収入水準（低）                | 二重生活による出費で、パート勤めを始める。赤字のカバーに励むが、赤字はいつにも解消しない。子ども達も従来の生活と違って、母親をたよりにするが、仕事を持つ身でままならない。 |

表 3-2-1 は新聞記事の定性データを、基本的軸の組み合わせによって得られたタイプで分類したものである。このようなタイプ概念は先に引用した松岡論文でも、下記のように使用されている。

表 3-2-2 タイプ概念からの下位命題作り 2

- |  |
|--|
| <p>1) 帰省回数の少ない夫は、「教養型・実用型」の余暇活動になりやすい。<br/>                 2) 帰省回数の多い夫は、「団欒型」の余暇活動になりやすい。</p> |
|--|

これらの「余暇活動における型」は先の表 3-2 のタイプ A、B、C、D と比較してみよ

う。表 3-2 の「子どもの教育型」、「老親重視型」は、表 3-2-2 の 2) の団欒型に相当し、表 3-2 の「会社生活重視型」は表 3-2-2 の 1) の「教養実用型」に相当するように思われる。このように既存のデータの中にあるタイプ概念を検討することによって、よりタイプ概念が精密になる。

**【3-3】 命題と命題を組み合わせて、新しい命題を作り出す（仮説の組み合わせ）。**

命題 1 X が大きいほど Y が大きい。

命題 2 Y が大きいほど Z が大きい。

これらの命題 1,2 から次の命題 3 が導かれる。

命題 3 X が大きいほど Z が大きい。

このような手法は、テーマとする領域が比較的新しい場合、変数が 10 以下で変数同士の高い相関関係がある場合、変数の時間的順序づけが困難な場合命題構成の方法として有効である。

表 3-3 仮説の組み合わせ

|   |
|---|
| <p>命題 1 子どもの養育期に単身赴任すれば、母子関係が密着する。</p> <p>命題 2 母子関係が密着すればするほど、父親役割の喪失感が高まる。</p> <p>このような仮説 1 と仮説 2 より仮説 3 が考えられる。</p> <p>命題 3 子どもの養育期に単身赴任すれば、父親役割の喪失感が高まる。</p> |
|---|

このように、関連度の高い命題同士の組み合わせから新命題を作りだせるが、この手法の欠点は命題群が拡大することである。この欠点を補う手段の一つは不可逆性の命題をみつけることであるが、もう一つの手段は仮説の精練を行なうことである。

**【3-4】 命題と命題との関連を考える（仮説群の精練）**

いま、仮に考えられる変数が 15 変数であるとしよう。それぞれの仮説の組み合わせを行なうとすると、すべて可能な 2 変数の組み合わせの総計は 105 となる。原因、結果の順序差をつけると 210 通りの可能性がある。しかし実際の調査票にリスト・アップできる質問項目は限られている。分析の効率化のためにも、仮説段階からの精練が必要になる。仮説の精練は、ある変数の組み合わせや命題同士の組み合わせは理論上考えられ難いと確認したり、命題と命題に関連に着目する理論モデルを提案することである。

**【3-4-1】 過程型定性モデルの手法**

変数の時間の流れに着目して原因→結果の時間の流れが不可逆的である変数を見つけ出す。

表 3-4-1 過程型定性モデル

|  |
|--|
| <p>命題 1 単身赴任による家族とのコミュニケーションの不足を感じるほど、家族との電話やメールなどの機会を追おう持つ。</p> <p>命題 2 家族との電話、メールなどの機会を多く持つほど、単身赴任後の家族の役割の再調節が</p> |
|--|

図られる。  
 これら仮説間の変数の関係が以下の流れである。  
 単身赴任によるコミュニケーションの不足→電話・メールの増加→家族の役割再調節  
 これを逆にした下記のような流れは考えられない。  
 家族の役割再調節→電話・メールの増加→単身赴任によるコミュニケーション不足

### 【3-4-2】パラメータの特定

変数の時間的流れが容易に確認できないとき、命題群のなかに次のような命題を発見できる場合がある。

- 1)  $X \rightarrow Y$ 、 $X \rightarrow Z$  すなわちその両命題にとって共に原因となるような変数（先行変数）が発見されることがある。そして  $Y \rightarrow Z$  である場合には、これらの命題は  $X \rightarrow Y \rightarrow Z$  のように書き直すことが可能である。

表 3-4-2 パラメータモデル

- 1)  $X$ （単身赴任前の家族関係） $\rightarrow Y$ （単身赴任についての家族のコンセンサス）  
 命題 1 単身赴任前の家族関係が良好であるほど、単身赴任についての家族間のコンセンサスが得られやすい。
- 2)  $X$ （単身赴任前の家族関係） $\rightarrow Y$ （単身赴任後の夫のストレス）  
 命題 2 単身赴任前の家族関係が良好であるほど、単身赴任後の夫のストレスは少なくなる。
- 3)  $Y$ （単身赴任についての家族のコンセンサス） $\rightarrow Z$ （単身赴任後の夫のストレス）  
 命題 3 単身赴任についての家族のコンセンサスが得られるほど、単身赴任後の夫のストレスは少なくなる。

命題 1、命題 2、命題 3 より、 $X$  をパラメータ（先行変数）と考えて次のような修正が可能である。

- 4)  $X \rightarrow Y \rightarrow Z$  より修正命題を提案する。  
 修正命題 単身赴任前の家族関係が良好であるほど、単身赴任についての家族のコンセンサスが得られやすく、夫は単身赴任後もストレスが少なくなる。

### 【3-4-3】条件づけ変数の特定

命題群が一定の条件のもとに成立することが、明らかになった時には条件づけ変数を特定することができる。

- 1)  $X \rightarrow Y$  という二つの変数の間に、他の一変数  $Z$  がある時のみに命題が成立することが明らかになる。

表 3-4-3 条件づけ変数

- 1) 夫（会社への帰属意識） $\rightarrow Y$ （妻のストレス）  
 命題 1 夫が会社への帰属意識を持てば持つほど、妻のストレスが増す。  
 この仮説は妻が夫の職業役割に対するコンセンサスがない場合に成立し、妻のコンセンサスのよって妻のストレスが変化するならば、 $Z$ （妻の夫の職業役割に対するコンセンサス）という条件づけ変数をいれて修正仮説を提示することができる。
- 2)  $X \rightarrow Y$   
     ↑  
      $Z$

修正命題 夫が会社への帰属意識が高く、しかも妻の夫の職業役割に対する役割に対するコンセンサスが低い時は、妻のストレスが増す。

**【3-4-4】原因説明図式の適用**

ある事象（従属変数）に作用する一群の独立変数があり、しかもそれらの独立変数群に時間的順序づけが可能である場合、独立変数群に性格づけをすることによって命題群を整理する。 $X1 \rightarrow Y$ 、 $X2 \rightarrow Y$ 、 $X3 \rightarrow Y$ 、 $X4 \rightarrow Y$  しかも  $X1 \rightarrow X2 \rightarrow X3 \rightarrow X4$  である時はこれらの独立変数を下記のように整理することができる。

- 1) X1 がある事象が発生せざるを得ない客観的状況として位置付け、『押し (push) の変数』と呼ぶ。
- 2) X2 をその客観的状況としての『押し』を顕在化させる動機づけとしてとらえ、『引きがね (triggering) 要因』と言う。
- 3) X3 はある事象が発生するにいたって、人々に目標とされた誘因である。これを『引き (pull) 要因』と言う。
- 4) X4 は、事象が最終的になんらかの形をとって現れるようにさせる力である。これを『通路づけ (canalizing) 要因』という。

このような原因説明図式は、ザイゼルによって提案され、さらにラザースフェルトによって整理された。

表 3-4-4 原因説明図式

定性データ（新聞記事表2参照）の中の事例に単身赴任を命ぜられ、生活問題が深刻化し、ついに転職に至ったケースがみられる。終身雇用を原則としていた日本ではまだ珍しいケースであったが、今後のこのようなケースはどんどん増加していくと思われる。これらのケースを説明するのに原因説明図式を用いてみよう。

- 1) X1=『押しの変数』会社への帰属意識の薄さ
- 2) X2=『引きがね要因』単身赴任
- 3) X3=『引き要因』経済的報酬や新しい会社での地位
- 4) X4=『通路づけ要因』新しい職場を斡旋する人材紹介のルート

これらのすべての要因は、転職を決意するにいたる原因であるけれども、 $X1 \rightarrow Y$ 、 $X2 \rightarrow Y$ 、 $X3 \rightarrow Y$ 、 $X4 \rightarrow Y$  と言う仮説よりも、下記のような修正仮説のほうが、説明力が高いといえる。

- 5) 修正命題 会社への帰属意識の薄さが、単身赴任というきっかけによって顕在化し、報酬や地位の高い新しい職場が提示され、転職が紹介されて、終に転職にいたる。

**【3-4-5】ブロック推定モデルの適用**

変数の数が多く、そのうえ時間的順序づけが確定しやすく、フィードバックの遅れが多い時には、ブロック推定モデルが有効である。

ブロック推定モデルは、原因→結果の命題構成をする時に、原因は原因の変数の部分集合（ブロック）があり、結果には結果の変数の集合（ブロック）があると考える点から出発する。

- 1) 変数を下記のような群にわけろ。
  - 1-1) 集合体の外部にある変数
  - 1-2) 集合体の資源ないしはインプットを表わす変数
  - 1-3) 集合体の構造を表わす変数
  - 1-4) 集合体の統合を表わす変数
  - 1-5) 集合体のパフォーマンスを表わす変数
  - 1-6) 集合体のアウトプットを表わす変数

これらは本質的にはインプット、スループット、アウトプットのシステムモデルである。
- 2) 一定の原因・結果の命題構成が得られた後は、変数と変数のフィードバック効果（可逆性）を考える。たとえば、パフォーマンス変数からの構造変数へのフィードバックやアウトプット変数から資源変数へのフィードバックである。
- 3) ブロック推定モデルは、ある変数の相関関係が非常に高いが別の変数群の相関関係は非常に低いという場合有効である。

表 3-4-5 ブロック推定モデル（付図 1 参照）

|  |
|--|
| <p>1) 変数のブロック化</p> <p>1-1) 集合体の外部にある変数→社会構造レベルの様々な変数<br/>例えば経済の次元における企業の成長率や経営形態、政治の次元における社会的ネットワークの量と質、価値体系の次元における業績主義的価値観や体制的価値観など…</p> <p>1-2) 集合体の資源ないしはインプットを表わす変数<br/>収入、貯蓄、資産、消費に関する知識、家族の労働力、家族のウェルビーイング、学歴、家族の精神力</p> <p>1-3) 集合体の構造を表わす変数<br/>家族構成、職務構造、役割構造など…</p> <p>1-4) 集合体の構造を表わす変数<br/>家族役割のコンセンサス、階層帰属意識、集団所属意識、家族の価値観など…</p> <p>1-5) 集合体のパフォーマンスをあらわす変数<br/>職業活動、購買活動、情報、メディア行動、家事分担、コミュニケーション、家族の役割行動、地域社会行動、余暇活動など…</p> <p>1-6) 集合体のアウトプットを表わす変数<br/>夫の孤独感、妻の孤独感、子どものストレス、夫や妻の役割過重感、夫と妻の心理的距離の広がり、生活問題のパターン変数（二重生活浪費型、マイホーム崇拜型など）</p> <p>2) ブロック内の変数と変数のフィードバック<br/>夫の孤独感から妻の孤独感へのフィードバック、妻と夫の役割過重感から家族の役割行動へのフィードバック、夫と妻との心理的距離の広がりから子どものストレスへのフィードバックなど…</p> <p>3) ブロックからブロックへのフィードバック<br/>アウトプット変数ブロックから資源変数ブロック、構造変数ブロック、統合変数ブロック、パフォーマンス変数ブロックへのフィードバックが顕著である。単身赴任者への税制の変化のように、アウトプット変数からの構造変数へのフィードバックも起こっている。<br/>以上のような変数のブロックとフィードバック図を使用して命題作りの例をあげよう。</p> <p>命題 A 集合体の外部の変数とインプット変数の関係<br/>残留家族の周りの近隣関係が親密であるほど、残留家族員のストレスは少ない。</p> <p>命題 B 集合体の構造変数と集合体の統合変数の関係<br/>拡大家族であるほど、家族役割のコンセンサスは得られ難くなる。</p> |
|--|

- 命題 C 集合体の統合変数と集合体のパフォーマンス変数との関係  
 家族役割のコンセンサスが少ないと、家族のコミュニケーションは少なくなる。
- 命題 D 集合体のパフォーマンス変数と集合体のアウトプット変数の関係  
 家族のコミュニケーションが少なくなると、夫と妻の心理的距離が広がる、
- 命題 E 変数と変数のフィードバックの関係  
 夫の孤独感が高まると、妻の孤独感も高まる。

### 【3-4-6】抽象度の高い理論の適用

高度の抽象度の高い理論から引き出された一般的前提を使って仮説を構成する。

- 1) テーマに関連すると思われる抽象的理論における概念を吟味する。
- 2) 概念を定義し、より抽象度の低い操作的な変数に変換する。
- 3) 変数と変数の関係を命題の形で表す。

表 3-4-6 理論モデルからの仮説構成

- 1) G. C. ホマンズの攻撃・是認命題  
 ある人の行為がある人が期待した報酬より大きな報酬を受けた時、また予期した罰より小さな罰を受けた時、彼は是認的行動を行うことがおこなわれるであろう。そしてそのような行動は彼にとってより価値のあるものとなる。  
 この攻撃・是認命題を使用した単身赴任の仮説作りの例をあげよう。  
 命題 A 単身赴任以前に単身赴任による家族とのコミュニケーション障害をより心配した人ほど、家族とのコミュニケーション不足の許容幅を広げる。  
 命題 B 単身赴任直後のコミュニケーションが期待以上に成功と受けとめたなら、そのコミュニケーションをその後も意図的に維持しようと努力する。  
 命題 C 複数の単身赴任をした経験をもつ人ほど、単身赴任での適応は早い。
- 2) G. C. ホマンズの対人関係のバランス命題  
 ある人 P と他の人 O は相互に嫌いあっている。しかし話題 X については同意見であることに気付いている。P と O の間の相互作用はまれにしか起こらないし、機会も少ない。しかし X について同意見であることがわかると次のような二つの場合を作り出す。  
 一つの場合は P が O が X に対する意見を変えると次のような二つの場合である。もう一つの場合は、P と O の関係が、X に対する意見によって歩み寄り嫌悪の関係から好意的なものへ変化する場合である。この命題を単身赴任における命題構成に適用すると  
 命題 A 妻と姑が夫をめぐる争っている場合、単身赴任によって夫は調停役割を放棄し、妻は姑に対してばかりでなく夫との関係も悪化したかのように思う。  
 命題 B 妻と姑が夫をめぐる争っている場合、夫が単身赴任をしたことによって留守を二人で守るという意識が妻と姑に生まれ二人の関係が改善される。
- 3) R. K. マーソンの Audience Effect 命題  
 行為者が Audience によって観察されていることを強く認知すればするほど、ある Audience が行為者に与える Sanction の総和は行為者の役割遂行に強く影響をする。  
 単身赴任をとりまく近隣関係にこの Audience Effect 命題を援用すると  
 命題 A 単身赴任をしている夫の地域が緊密な近隣関係にあり、近隣の人々が一人で暮らしていることに異端のレッテルを貼れば貼るほど、夫は近隣社会での役割の遂行が困難となる。  
 命題 B 残留家族の近隣の人々が緊密な近隣関係にあり、しかも近隣の人々が夫についていかなかった残留家族に異端のレッテルを貼れば貼るほど、残留家族は近隣社会における役割遂行が困難となる。  
 以上のような 1) から 3) の仮説群はストレス源の認知がいかにおこなわれるかによって、単身赴任によって起こる問題の深刻さが異なることを示す仮説群であった。単身赴任をストレスとしてとらえ、個人のストレス反応の理論として H. マッカバンの ABCX モデル

を援用した松岡氏のモデルを紹介しよう。

3) H. マッカバンの ABCX モデル

単身赴任をストレス源 (A) として認知した個人は、個人の資源 (B) である収入や家庭管理能力などを援用してストレスの解消を図ろうとする。その際、ストレス源の認知の仕方 (C) が大きくその後の危機 (X) の回避に関わってくる。単身赴任を当事者がどのように受け止めるか、家族が単身赴任をどのように受け止めるか、周囲の近隣関係が単身赴任という家族の形をどのように考えるかという認知 (C) によって危機 (X) が累積されるかどうかが決まるといわれるというモデルである (付図 2 参照)。

- 命題 A 単身赴任に伴う家族内資源の再調整が失敗するほど、単身赴任によるストレスは高まる。
- 命題 B 単身赴任に伴う社会的ネットワークの再整備 (近隣関係の再編成など) が失敗するほど、単身赴任によるストレスは高まる。
- 命題 C 単身赴任に対する状況判断に関して、夫と家族との認知にズレがあるほど、単身赴任によるストレスが高まる。
- 命題 D 単身赴任以外のストレスを多く抱えた家族ほど、単身赴任によってストレスがさらに高まる。

4) Lazarus の心理的ストレス論を援用した田中のモデル

田中は単身赴任が単身赴任者のストレスに影響を与える過程を Lazarus の心理的ストレス論を援用して説明をしている。単身赴任を勤労者にとっての大きなライフイベントとしてとらえ、それは勤労者と家族の生活を大きく変える変化とみなしその変化こそが、ストレスサ (ストレス源) として認知されるとしている。そしてそのストレスサが影響を与える過程に仕事・組織的要因、家族・家庭的要因、物理的要因、当事者のコミットメントや信念などのブロックされた要因が存在するという命題をたて検証を行っている。

- 命題 A 単身赴任という変化 (ストレスサ) は、仕事・組織上の要因 (企業の転勤量、職場の単身赴任者の割合、労組の取り組み、転機制度の整備状況、転勤経験、昇進の有無) を媒介して単身赴任者のストレス反応となる。
- 命題 B 単身赴任という変化 (ストレスサ) は、家族・家庭的要因 (家族のライフステージ、子どもの人数・性別、妻の就業の有無、老親の同居の有無、世帯収入、家族統合度の変化、帰宅回数、電話回数、郵便回数) の要因を媒介して単身赴任者のストレス反応となる。
- 命題 C 単身赴任という変化 (ストレスサ) は、物理上の原因 (赴任期間、赴任距離、職場満足感、残り期間の確信度) を媒介して単身者のストレス反応となる。
- 命題 D 単身赴任という変化 (ストレスサ) は、当事者のコミットメントの要因 (組織コミットメント、職場満足感、転勤観、生活満足感) を媒介して単身者のストレス反応となる。

田中は、これらの仮説を検証するために、単身赴任者だけではなく転勤家族帯同者、非転勤者という統制群を設定して比較検討し、単身赴任という変化によってのみ起こったストレス反応を抽出している。

**【4】結論—家族の多様性を前提とするモデルへ—**

単身赴任家族の研究を例にとって様々な仮説構成の手法をこれまで説明してきた。単身赴任をいうテーマ一つをとってもこれだけたくさんの「研究」や「仮説構成」が積み重ねられている。しかし調査に先立つ仮説の構成は一方では、調査の分析をあらかじめ縛ってしまう枠にもなりかねない。単身赴任という変化を、家族を分離させるストレス、職業上の環境の変化から生じるストレスとして捕らえる枠組み・モデルは、自ずからその仮説の中に大きな前提を組み込んでしまっている。

物理的な距離が遠くなるほど、人と人との繋がりに変化が生じ、人と人との社会的距離が

離れ、心理的距離もまた疎遠になるという前提である。確かに接触の減少は、人と人との関係に大きな変化を生み出す。しかしあまりにも距離がない個人と個人の関係、しかも家庭という密室での家族関係は、今日家庭内暴力、児童虐待など大きな問題を抱えていることも事実である。この前提を再考することこそ、今日の家族のあり方を見直すためにも必要ではないだろうか。今日の家族が提起している問題は、物理的に社会的にも心理的にも近い人々からなる家族が、ストレスを抱えないという暗黙の了解こそが、根本から問われているのである。

単身赴任という変化はまず赴任者と家族との間に物理的距離を生み出す。この物理的距離はやがて赴任者と家族との間の接触の頻度に影響を与え、社会的距離として認知されるようになる。しかしこの社会的距離がそのまま赴任者と残留家族との間の心理的距離に反映されるわけではない。例えば単身赴任という変化によって物理的に遠く離れたがゆえに、夫婦間や親子間の会話量を増やして、逆に家族関係を強めていったという調査結果（田中、1999）は、物理的距離が、社会的距離にそのまま投影されるものではないことを物語っている。家族の価値観や単身赴任後の関係の持ち方の変化によって、社会的距離の認知的許容範囲は変化し、心理的距離への投影度も異なる。

付図3は、単身赴任を取り巻く物理的距離、社会的距離、心理的距離の関連を示したものである。社会的距離をあらわす変数は、単身赴任後の接触の絶対量よりも単身赴任前と比較しての変化量やその質の方が、大きく影響を及ぼしているのではないだろうか。また個人間の心理的距離は、必ずしも接近していることが期待されているわけではない。個人が家族員といえども他の家族員に対して適度な距離を持つことが必要であり、その距離はライフコースによって変化するものを考えられる。個人個人に応じた適度な距離が確保できない時は、ストレスが生じると考えられる。例えば母と子の心理的な距離が異常に接近しすぎた過干渉は、子にとっては大きなストレスとなる。

また家族以外の近隣の社会的環境も、社会的距離および心理的距離に大きな影響を及ぼしている。E. ホールはその著書「沈黙の言葉」の中で人と人との間に存在する文化的な社会的距離のとり方に対して鋭い分析を加えている。これまで家族分析では問題にされてこなかったが、文化的な価値観やそうした価値観のGAPから生じる社会的距離の問題も今後は多文化共生時代を迎えて家族関係の重要なテーマとなるであろう。

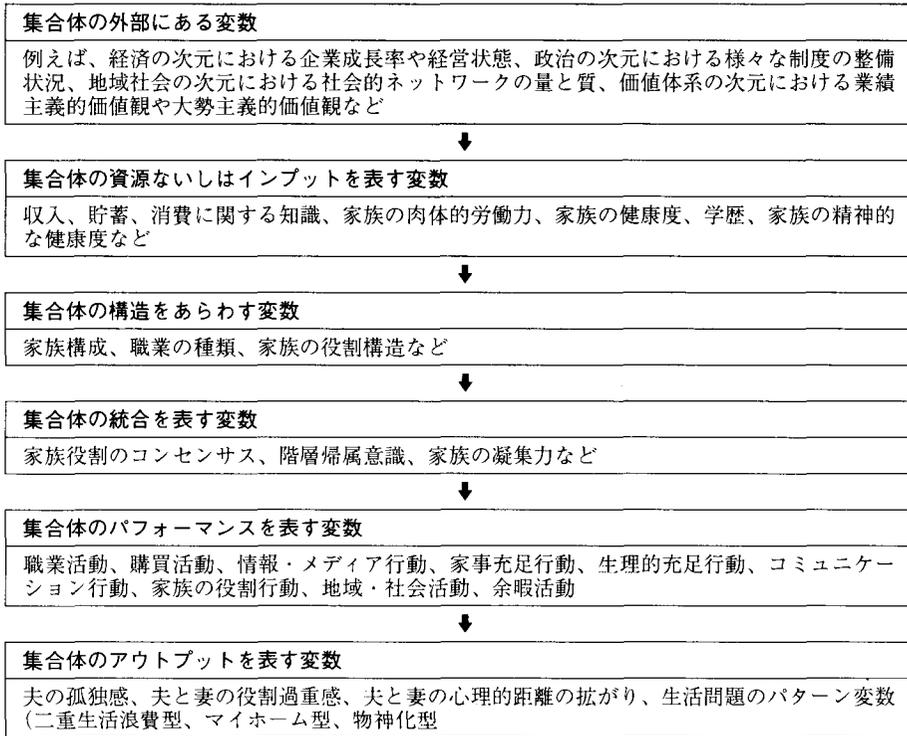
#### 参考文献

- 1) 行政管理庁（1984）“転勤者の別居状況と転校の問題点”『労働時報』第2682号，pp. 52-56
- 2) 松岡英子（1983）“単身赴任に関する一考察”『家族関係学』，『家族関係学』pp. 35-40
- 3) 宮崎英子（1983）“地域的移動と世帯分離—単身赴任とその生活—”『家庭科教育』，57(9)，pp. 73-83
- 4) ホール，E, T（1989）国弘正弘訳『沈黙の言葉』南雲堂

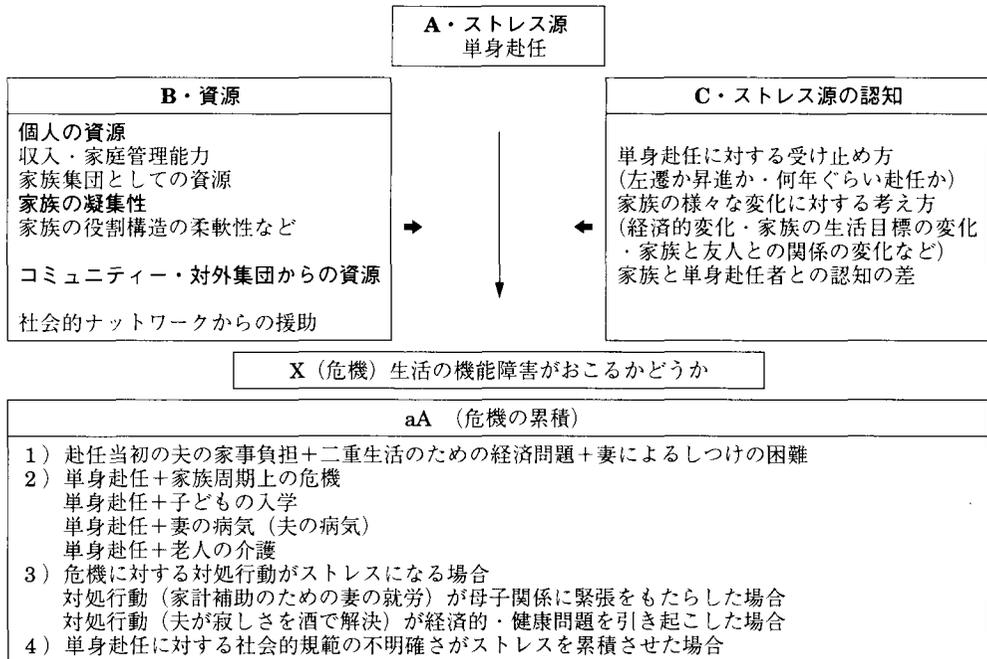
- 5) ホマンズ, G. C. (1956) 馬場明男、早川浩一訳『ヒューマングループ』誠信書房
- 6) 本村汎・磯田朋子 (1983) “単身赴任家族の生活実態”『大阪市立大学生活科学部紀要』, 31, pp. 331-343
- 7) Lazarsfeld, P. E. & others eds. (1922) “Continuities in the Language of Social Research” Free Press
- 8) ラザラス, R. S. (1991) 本明寛, 春木豊, 織田正美監訳『ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究』実務教育出版
- 9) マッカバン, H. I. & パターソン, J. M. (1983) “The family stress process: The double ABCX model of adjustment and adoption.” The Haworth Press
- 10) マートン, R. K. (1974) 森東吾, 森好夫, 金沢実訳『社会理論と機能分析』現代社会学体系第13巻 青木書店
- 12) 日本経済新聞 (1986) 7月20日版 朝刊 pp. 12
- 13) 日本経済新聞 (1985) 8月21日版 夕刊 pp. 13
- 14) 労働法令協会編集部 (1985 a) “単身赴任の88%はあきらめ派”『労務管理通信』, 25(11), pp. 2-43
- 15) 労働法令協会編集部 (1985 b) “北拓銀が単身赴任状況調査”『労務管理通信』, 25(10), pp. 16-18
- 16) 労働法令協会編集部 (1986) “単身赴任者の生活と意見”『労務管理通信』, 26(28), pp. 20-21
- 17) 労働省婦人局 (1989) “単身赴任家庭の問題”『青少年問題』, 35 (3), pp. 13-17
- 18) 労務行政研究所編集部 (1986 a) “転勤をめぐる各種取り扱いの実態 (上)”『労政時報』, 2803, pp. 2-43
- 19) 労務行政研究所編集部 (1986 a) “転勤をめぐる各種取り扱いの実態 (下)”『労政時報』, 2805, pp. 2-38
- 20) 読売新聞社婦人部編 (1982)『ああ単身赴任』講談社

「家族の多様化」と家政学における仮説構成

付図1 単身赴任家族の生活機能障害に関するブロック推定モデル



付図2 単身赴任家族の生活機能障害に A・B・C・X モデルを用いた場合



付図3 家族と単身赴任者の認知の差が生じる過程

